

# Essay

Sapiarc.com

2014年9月16日(2014-5)

## 叔父圭三への追憶

叔父圭三は父の末弟で、私の親族のなかで唯一の戦没者だ。今年の9月16日、すなわち今日は、この叔父の没後70周年に当たる。70年という長い月日を経た今、ここに叔父への追憶を書いておくことは無意味ではないだろう。叔父は1909年(明治42年)2月10日生まれだから、35歳の若さで亡くなったことになる。戦死公報が届いたのは、実際に亡くなってから2年近くも後の1946年(昭和21年)8月9日のことで、遺族や親族はそれまで「もしや」という期待を持ち続けていたのだ。

叔父は耳鼻咽喉科の医師だった。旧大阪府立豊中中学校を卒業後、1927年(昭和2年)に創立されたばかりの私立大阪高等医学専門学校に入学した。当時、普通の医学専門学校は4年制だったが、この大阪高等医専は全国で初めての5年制医専で、普通の医専よりも高度の知識・技術をもった医師を養成することを目的としてされている。校舎は高槻市内に建設され、後身の大阪医科大学は現在もその地にある。

同医専を卒業してから、造兵廠(大阪砲兵工廠)病院に勤めながら、京都大学附属病院で研修した(のちに博士論文を提出して医学博士の学位を得たが、戦争で手続きが遅れ、学位記が家族の手元に届いたのは戦後になってからで、本人の戦没後1年以上あとのことだった)。1935年(昭和10年)10月に穂波叔母と結婚してからは、丸亀市や鳥取市の病院に勤務したが、1941年(昭和16年)7月に陸軍に召集された。召集される前に、短期現役軍医候補生に志願するという制度があり、これに応募する方が、短

期間で見習士官を経て軍医少尉または中尉になったので、叔父もそういうコースを経て軍医少尉になったものと思われるが、確かなことはわからない。とにかく、叔父は召集された後、直ぐに軍医少尉になった。

叔父の最初の駐屯地は、満州(現在の中国東北部)の佳木斯(日本人は普通チャムスと読んでいる)で、ここはハルビンよりも約300kmほど東北の、松花江に面した町だ。北方約100kmにはロシア(当時はソ連)との国境となっている黒龍江がある。かなり辺境の地という感じがするが、当時から相当大きな町で、1940年(昭和15年)には、佳木斯医科大学(実際には日本の医科大学)が設立されている。叔父が属していたのは姫路を本拠地とする第10師団で、この師団は関東軍(満州に駐留していた帝国陸軍をこのように呼んでいた。日本の関東地方とは無関係)の一部をなしていた。当時はソ連との関係はとくに悪くはなかった時期だったので、この地での勤務は、冬の凍てつく寒さを除けば、特別に辛いものではなかったのではないかと思う。

私は、この時期に叔父からももらった軍事郵便葉書(私が送った慰問の葉書への返事)をずっと持っていたが、今から十数年前に、叔父の長男(つまり私の従弟)で、私と同年の省吾(2005年に死去)に渡したので、私の手元には残っていない。私が4歳か5歳のときのことだから、葉書を自分で全部書いたはずはなく、母か祖母が手を添えていたらしく、そのことを「誰かに手伝ってもらったでしょう。」と書いて

であった。子供に読めるように、カタカナ書きのものだったと思う。

叔父は子供好きの優しい人だった。私より5歳年上の長兄は可愛がってもらったことをよく憶えているようだ。写真を撮るのが趣味で、自分で現像・焼付けまでした写真が相当数残っている。私の4歳ぐらいのときの、非常によくピントのあった写真もある。当時のカメラでは、ピントのあった写真を撮ることもひとつの技術だった。

満州での勤務がそのまま続けば、終戦後ソ連に抑留されることにはなっただろう。しかし、生還できた可能性は高かっただろう。しかし、南方でのアメリカ軍との戦闘が日本軍に不利になるようになってから、関東軍から南方に移動する部隊が多くなったことはよく知られていることだ。その状況のなかで、叔父は1943年(昭和18年)の2月に一旦除隊となり、鳥取市に戻っていたが、1944年(昭和19年)4月に再び召集され、あとでわかったことだが、フィリピンのミンダナオ島に送られた。

叔父は、再召集された直後の1944年4月末に、私の兄弟3人が両親、祖父母と暮らしていた兵庫県西宮市仁川(ニカワまたはニガワ。現在の地名は仁川町4丁目)の家になんとも2日間ほど滞在した。当時私は小学校(当時国民学校)2年生になっており、このときの叔父の言動をかなり鮮明に記憶している。満州の風土病だったのかもしれないが、太腿部にかなり大きな潰瘍跡があり、ほとんど治癒していたが、それにまだ塗布剤を付けていた。そこを、子供の私にも平気で見せていたことが妙に記憶に残っている。また、軍医とはいえ将校だから、軍服を着ているときには、軍刀を携行するのが当たり前で、新しい軍刀を大阪の偕行社(旧帝国陸軍将校クラスの親睦互助組織)に注文したと言っていた。それまでも軍刀は持っていたはずだが、何故新しいものが必要になったのかは知らない。

そのときは、こちらは子供だからわからなかったが、今思うと、今度は南方に派遣されるのは間違いないので、叔父は生還できない可能性が高いと感じていたのだろう。しかし、そんなことは口が裂けても言えない雰囲気のため、明るく振る舞っていたが、実際には、このときが父母(私の祖父母)をはじめ一家との今生の別れになると自覚していたのではなかったかと思う。

それから暫くあとで、叔父が所属する部隊の発足式が姫路であって、それには妻の穂波(私には叔母)のほか、兄の秀一(私の父)、姉の西谷よしゑ(私には伯母)が見送りのために出かけた。しかし、姫路の大通りを多数の軍服軍帽姿の兵士が軍隊式の分列行進をしたので、そのなかのどこに叔父がいるのかわからなかったらしい。あとで述べるように、叔父が今度所属した兵団は第10師団ではなかったのだが、そういうことは後でわかったことだ。

生前の省吾から聞いたことによると、叔父が属した兵団は釜山からミンダナオ島に向けて出港したという。私は、これを聞いたとき奇妙な感じがした。ところが、1982年(昭和57年)9月になってから公刊された『豹兵団戦跡概要編集委員会編「第30師団(豹兵団)の記録=レイテ・ミンダナオ戦跡概要』』という「記録」があり、これを読むと、省吾が言ったことの意味がわかるのだ。この「記録」によると、再召集された叔父が属したのは第30師団(豹兵団)だった。この兵団は、元々は関東軍の一翼を担うものとして、1943年(昭和18年)6月に平壤(現在のピョンヤン)で編制された。しかし、南方での戦局の悪化に対処するため、1944年(昭和19年)4月になってフィリピンの防衛に転用されることになり、釜山からフィリピンに向かったのだ。

叔父はこの兵団のなかの第四野戦病院に配属されたのだが、この野戦病院は、1944年(昭和19年)5月初めに平壤ではなく姫路で編制され、直ちに広島宇品港から釜山を経て、平壤に入った。しかし、そこに居たのはごく短期間で、釜山に逆戻りし、そこからミンダナオ島のスリ

ガオに向かい、そこに野戦病院を開設した。それが完了したのは6月初めだった。叔父がミンダナオ島にいたときに、我が家に届いた軍事郵便葉書が1枚だけあった。それには、場所はもちろんハッキリ書かれていなかったが、どこかに用事で出かけた途中に、椰子の実を取って、中のジュースを飲んだことが簡単な絵を添えて書かれていた。まだのんびりしていた時期が僅かだけあったということだ。

しかし、1944年(昭和19年)の後半から、アメリカ軍の空母艦載機による空襲が日増しに激しくなり、被害が急速に増大し始めた。それに加えて、フィリピン、とくにミンダナオ島では、住民の反日感情が極めて強く、日本軍は武装した住民のゲリラ活動に悩まされた。軍医は、さまざまな重傷や病気に対処しなければならないから、野戦病院は繁忙を極めた。

また、潜水艦や艦載機による艦船への攻撃によって、日本軍は補給を断たれて孤立するようになった。戦争末期には、ミンダナオ島では食料も医薬品も底をついてしまい、一般の将兵たちはもちろん、軍医を含む野戦病院勤務者もぼたぼた倒れた。「記録」によると、第四野戦病院には、開設時に軍医、衛生兵、看護婦など248名が勤務していたが、そのうち終戦時に生存していたのは僅か32名だった。生存率は12.9%に過ぎず、豹兵团全体(最初は16,131名で、生存者は3,259名)の生存率20.2%をかなり下回っている。

ミンダナオ島の野戦病院の悲惨な有様は、最近新潮文庫の1冊になった「蛍の航跡」の中の1章に詳しく書かれている。この本の著者は、精神科医で作家の帚木蓬生氏だ。太平洋戦争の舞台となった広範な地域での軍医の実態を、生還した軍医が書いた多数の実話を元にして、小説の形にしたもので、第1回医療小説大賞を受賞している。

叔父が具体的にどういう仕事をしていたかは何もわかっていないが、はっきりしていることがふたつだけある。ひとつは、1944年(昭和19年)9月半ばに、ミンダナオ島から二百数十名の

傷病兵を北方にあるセブ島の兵站(へいたん)病院(野戦病院よりも設備が整っていた)に移送することになり、叔父はこの移送業務の指揮官だったこと、そして不運にも乗船した船が途中で行方不明になったことだ。上記「記録」には、「指揮官・田隅軍医少尉以下全員、患者もろとも消息を絶った。」と書いてあるのみだ。戦死公報には、「魚雷攻撃によりセブ島近海で戦死」と書かれている。いずれにせよ、乗船したのは大きな船ではなかっただろうから、魚雷1発で、あつという間に沈没したのではないかと私は思っている。上記のように、ミンダナオ島での戦争末期は極めて悲惨なものだったから、それを経験する前に亡くなったことは、見方によってはまだしも幸せだったとも言えるかもしれない。今となってはどうしてもよいことだが、叔父の階級は死後に軍医中尉に昇進した。

もうひとつははっきりしていることがある。それは、叔父の人柄の良さを端的に示しているものなので、この際ぜひ書いておきたい。叔父の部下の衛生兵のひとりが、「この戦争は負けだ」というようなことを不用意に口走ってしまい、それを聞き咎められたのだ。こういうことを当時の軍の内部で言うことは、利敵行為として極めて厳しく処罰された。このときも、軍法会議にかけることを強硬に主張する者がいた。軍法会議を開けば、結論は銃殺刑になることは明らかだった。そこで、叔父は、上層部に対して、その衛生兵が軍医としての自分の業務遂行に欠くことのできない人材なので、今後そのような発言は絶対にさせないから不問に付して欲しいということを粘り強くかけあったのだ。

これは、当時としては、大変なことだっただろうと思う。それほど、軍部の精神教育というものとは徹底的に行われていて、戦意を損なうような発言は直ちに死刑に繋がるという状況のなかで、平常心に基づく行為は危険を伴った。このようなことは、現在では考えられないことだが、当時はそういう状況だったのだ。しかし、叔父は頑張って、とうとうその衛生兵の命を救うことに成功した。叔父は、その衛生兵に向かって、「今度のことで往生したぞ。お前も今後は絶対に気をつけろ。」と言ったそうだ。何

---

故そういうことがわかっているかということ、当の衛生兵が生還して、自分の命を助けてくれた軍医の身元を調べて、穂波叔母に連絡してきたからだ。これは戦後直ぐのことではなく、多分20年以上を経てからのことだったと思う。

叔父は医師だったのだから、病気を治すのが仕事だった。しかし、上記のことは、病人の命を救ったわけではなく、狂気が支配していたと言ってもよい戦時下にあっても、平常心を保って、人ひとりの命を救ったものだ。叔父がそのような人だったことは、私の誇りである。

叔父は、子供のときから、珍しいぐらいに良い性格の持ち主であった。そのことについては、私は祖母から何度も聞かされた。例えば、子どもたちのおやつに大きさの違うみかんを渡すと、叔父は必ず一番小さなものを自分に取り、大きなものを兄たちに渡した。祖母は、面白がって、わざとそうしたこともあったが、いつでも結果は同じだった。そのような叔父が生還しなかったことは、祖母や穂波叔母にとってはもちろん、叔父が結婚するまでの暫くの間、ひとつ屋根の下で暮らした私の母にも真に悲しいことであったに違いない。私は、最後に会ってから僅か半年後に叔父が死去したことに、慥然たる思いを今でも禁じ得ない。

本稿を草するに当たって、長兄恒生からいろいろと教えてもらった。そのことを記して、謝意に代えたい。（おわり）